

すめーちめ

七名様ありがとうございました

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ASKに投稿する予定だったノベルゲーム風小説の成れの果て。

S
O
L
I
D
O
N

目

次

1

S o l d o n

7月21日。

うだるような暑さとけたたましいセミの歓待に包まれた、なんでもない昼下がりに。

空は快晴——雲一つない青に悪態の一つでも吐きたくなる透明度は、紛う方なきあつぱれあつぱれである。

あろうことか教室の窓側。直射日光が肌を刺し貫く拷問椅子のような場所に座らされた、哀れなる仔羊。

まあ僕なのであるが、余りにもな暑さと余りにもな”遅さ”に完全に突つ伏してしまつていた。机に。

教室。学校の、教室。

この一室はすでに喧騒の過ぎ去つたガランドウ——半日終わりの授業でみんなさつさか帰つてしまつた、といえればわかりやすいだろうか。

生徒も教師もいない、いや、教師は職員室にいるかもしれないけどぱつと見存在しな

い、熱気と鳴き声だけで満たされたその世界に、どうして僕が座っているのか。

それは非常に簡単なことだ。ナコト写本ばりに簡単なこと。

人と待ち合わせをしているから——それに尽きるのである。

そろそろ来てもいい頃合いだ。

なぜって、約束の時間を大幅オーバー。具体的に言うとな二時間強、オーバーしているから。

文句の一つ言っただってバチは当たらないだろう。バチが飛んでくる状況は想像に難いけれど。

それじゃあ、と。

まだ起きないでいいだろう

いきなり空を見上げてみる

——意地でも顔を上げてなるものか。

方ポンされて手を合わせての平謝りをされるまでは、僕は起きない所存である。

まだ起きないでいいだろう

いきなり空を見上げてみる

唐突に起き上がって天井を仰ぐ——快晴。

雲一つない空が美しい

はて。

空はこんなにも美しかっただろうか——じゃ、なくて。

さすがの異常事態に体を起こし、あたりを見渡した。

いやいやいや、と。

いやいやいやいや、と。

そこは——一面の海だった。

そこは——一面の山だった。

差し支えなければ教えてほしい。オツケーG○○GLE。

座っていた姿勢で、突つ伏した姿勢で、唐突に海に投げ出されて——溺れない方法。

どうやら差し支えあるようで、G○○GLE先生はうんともすんともすつとこどつこいとも言うってくれなかった。防水加工されてないから拗ねてしまったのだろう。私を塩味にして食べる気ですか、と。

しまった思い浮かべていたのはsiriだった。G○○GLE先生ではsiriに

勝てないということだろうか。

わからない。

わからないが——まあ。

口に入ってくる水と、鼻から入ってくる海水の苦しさを前にしては、siriのほうが強いことは明白である。

いやわからない。多方面にケンカを売るつもりはないから安心してほしい。一番は火狐だよね。

がぼごぼと聞こえる濁った呼吸音が、まるで他人事のように響いては去っていく。遠く。遠く。

同じようにあれほど感じていた日差しも、遠く、遠く。

わかった。

わかった——これは。

BAD END、というヤツである。

リスタート

山。

山だ。山田だ。センチメンタル小室マイケル坂本ダダ。

ミンミンミンミンシャワシャワシャワシャワホーツクツクツクツクツク。

7月にはまだ早かろう種類までいる気がするけれど、うるさいことうるさいこと。

そしてセミだけでなく、アブやら蚊やら、見たこともないくらい大きい虫やらが飛んでいて、正直お近づきになりたくない。ご趣味は何ですか？ 僕は殺虫です。

しかしこちとら学生服。

しかも夏服なので、防御力はお察しである。学ランって防刃性能あるらしいね。

背の高い草木。僕の腰のあたりまであるそれらは、少々どころでなく鋭利だ。はっぱカッターである。

学生服が長ズボンでよかった反面、腕の守りが薄い。籠手を寄越せい！

とはいえ、僕の座っていた机もきれいさっぱり消えてしまっている——待とう。何をそんなにすんなり受け入れているんだ。

5 W 1 Hが必要である。

5 ワット1 ヒットが必要だ。

まず、ここはどこなのか。

カバンにしまつてあつたスマホを取り出す——Oh, カバンがないじゃないか。

今がいつのなのか。

まあ待て、カバンにしまつてあつたスマホを取り出して調べるから。カバンないけど。

僕が誰なのか。

ちよつと待つていてほしい。今カバンにしまつてあつたスマホを確認する——いや、しなくていい。そもそもスマホに個人情報とか入れてないし。

そう、僕は……あー、僕の名前は。

なーんだつけねえ。

ナーンダツケネエである。不思議の国のナーンダツケネエ。

とりあえず思い出せないので現地人に出会ったらナーンダツケネエと名乗ろう。

さて、自分の名前を確認した。

そしてそれ以外何もわからないことも確認した。

ではどうするか。

前に進もう。

前がどつちなのかはわからないけど、まあ僕の向いてる方向が前だよ。

一応、選択肢は持っておこう。

太陽は体に対して左上の空でコロナレーザーを放っている。

太陽に向かって行こう

太陽を向いてバック走だ

男は黙ってバック走だ。古事記には僕が書く。

どうせだから高笑いしながら行こう。そのほうが気持ちがいい。万葉集にも書いてある。

それでは3、2、1——GO！

ふわっ。

浮遊感。

違う。

踏みしめるべき地面がないのだ。

ナコト写本ばりに簡単に言う——足を踏み外した、という感じ。

記憶に相違なければ周囲は山で、崖なんかなかったはずなんだけどなあ。

とまあ、後の祭り。朝の頂。

あれよあれよに、グッバイ現世。照り付けるような日光は一瞬で鳴りを潜め、僕を囲ったのは深く暗い闇。

崖じゃなくて穴だったか——なんて。

この穴を掘ったモグラを一生涯呪いながら、僕の生涯は幕を閉じるのである。

リスタート

前に進もう。

前に進むと決めたのだから、前に進むべきである。

であれば踏み出すべき足は前——太陽に向かって一歩。
浮遊感。

ふわっ。

足を踏み外した——わけではない。どちらかというと、めっちゃ強い風が下から吹いてきてメリー・ポピンズ。ポピンズだっけ？

とかくそんな感じで、ふわあつと。

僕の体は宙に浮いたわけである。ヤーチャイカ。

それに驚く声を出す暇もなく、今度は後ろからの潮流。いや、空にいて何を、と思う

かもしれないけれど、そうとしか表現できない力の流れにぐぐいと押されて、僕の体は前に進んだ。前——太陽のほうへ。

その速度は驚異的。空気抵抗なんのその、物理法則を完全に無視した潮流は、タカとワシが豆鉄砲を食らったときの顔を思い浮かべているハトくらいの速度で進んでいく。

僕のいた草原のような場所、囲んでいた山をあつという間に越え、その後ろに連なる山々山々山河破れて山があつたわ。

山だ。山しかない。なんだここ。少なくとも日本じゃない——だって目の前にそびえたつ山、軽く十万mくらいありそうだもん。日本っていうか、地球じゃないよね。富士山30000m強でしょ。

広い——広く、険しく、高い。

これは登山家も意欲バリバリだろう。そこに山があるからだ。山を登る人の気持ちとは全く理解できないけれど。

しかしそんな山に向かって、潮流は僕を運んでいく。

正確に言えば元から潮流はそこに向かって流れていて、僕が無断侵入させてもらった感じに近いのだろうけれど。

そしてぐんぐん上っていく潮流。

高さにして五万feetくらいはありそうだ。なぜフィートで例えた。

しかし……このまま上って行っていいのだろうか？

酸欠とかならない？ なるならもうなってる？ 確かに。

……。

そーっと、潮流の範囲外に身を乗り出してみる
自然様万歳。潮の流れに乗ってどこまでも行く

潮流は雲を突き抜け、山の上の上の上の方へ進んでいく。

地平が見える。空が黒くなってきた。

この星も丸いのだ、という事がわかる。

潮流の勢いが弱まってきた。だということに、速度は変わらない。

あー……あーね。

そーいうことねー……。

ふわあ……。

今度はメリー・ポピンズではなく、カーズ様になったワケだ。

この星のどこまでに大気があるのかわからないけれど。

まあ、まだ、寒く、ないし……。

大、じよ。

リスタート

男は度胸である。

潮流の中を掻き分け、泳いで——無理やり外に出る。

今度は浮遊感じゃなかった。

浮遊感じゃなく、落下。見事なまでの落下。サヨウナラ！

しかしやはり物理法則の違う世界。空気抵抗を全く感じない。だから早い。はっ

やーい！

超高度にあった僕の体は、しかし凄まじい速度で地面に近づいていく。

あ、これ死んだわ。

これは死んだ。うん。もうどうしようもない。

お手上げである。人間、高いところから落ちたら死ぬんだよ、つていう授業が今なら
できる。

それでは皆さん、ゴキゲンヨー!!